

皆様、遠くへ座られてますが(会場笑)必ず授業と(一)と前が空くんですけれど、別にあんまり唾とほしませんから(会場笑)せひ前の方へお越しただけたらと思ひます。

緊張しますから放つて置いて頂いた方が好いと思ひますので、思ひ思ひに論議の勉強をして頂いたら好いかな、と(一)に思ひます。

今日は財団法人・水府明徳会の方のお話でございます、東京海上自動車火災の方は放つておいて頂きたいんですが、私共実は慶應大学の出身でございます、私は慶應幼稚舎から入つてます。普通部、それから慶應高等学校、そして慶應大学の商学部でございます、商学部を出たのが昭和五年で、東京海上に就職いたしました。この三月で五十歳になります。五十になつた割には全く勉強しておりますので、おまじつに(一)場所でお話をする、と馬脚を現すこと

一 はじめに

水戸・徳川家のこと

水府明徳会会長理事
徳川 正

がございますので、圓かない振りをしてやり過していただけたら、という風にお願いを申し上げます。お話をスカーッとさせて頂きたいと思えます。

一 水府明徳会

今から十五年前の話になります。水府明徳会ですが、こちらは昭和四年に私の祖父が興しました財団です。お察しの方もいらっしゃると思いますが、今の相続税制ではとてもはありません。人が全ての財産は散逸してしまします。

田畑を売り払って住む所も四畳半一間で充分な訳ですけれど、今も放逐があります。水戸藩門、彼が水戸家の二代目ですが、水戸黄門光圀公が最後の十年間隠居をした茨城の常陸太田市にありまして西山荘と申します隠居所を売り払って、やはり祖先様からお預かりしている伝来の仕立だとか宝物を売り払ってしまつていのはやはり忍びないし、水戸といつ所縁の場所にまどまって存在する方が直しかつていので、まだ、爺さんは息子である私の父を見て、私のよつな孫を見て、これは将来危ない、あいつらに任せたら、といつともあつて、今のつちに財団に入れよつと昭和四年に財団を興したといつことです。

昭和五年に、保存している色々な宝物を、やはりお人に見せないとけないといつ役所のつ指摘があつて、彰考館徳川博物館を建て、そこで今現在、皆様方に保存しているものをあ見せるとともに、光圀公が上つた西山荘も、水戸から車で四十分ぐらいの場所ですが、その

場所を「見ただけ」ように公開しています。

財団の方は、品数でいつと約三万点位の収蔵品がございます。中にはナシでお馴染みの水戸黄門の、助さんだか格さんだか懐から「えい、や」と出す印籠の現物であるとか、刀であるとか鎧であるとか、お姫様が乗つた御籠などが残つています。私が個人で持つておりましたならば、もう相続税の対策になりますのでとんどん売ってしまつて、三掛けの三掛けですから、半分の一くらいしか残つていなくなつたと思えます。我等はやはり、それを残して、西暦、二百年後の方々に「見上げて往時を偲んでいただく」ことが出来たら、といつのを財団の使命にしており、この財団の運営をさせていようと思つています。

また、光圀さんが三十歳から始めた「大日本史」といふ日本の歴史書があります。その歴史書の編纂には、ナシでお馴染みの助さん格さんも登場してゐるわけですが、いづつの方々が言はつてありまして、全部筆写をして、史料を集めます。その史料がやはり二万九千〇冊ほど現存し、これを保存しています。今も古文書の図書館としても機能している彰考館徳川博物館で、『大日本史』の草稿本も実際に研究者の皆さんがお手に取つてご覧頂く事が可能です。お申し込みがあれば対応させていただきます。

多く皆さん方が、それだけ財産を持つてゐるのに何で東京海上で仕事をしているんだ、と噂なですが、やはり財団で飯を食つて有り得ないんです。特に財団法人の会長理事といつのは法律上、お給料をもらつてはいかたといつことになつておまして、私は夕働者です。然るに四

分の飯はどこかで稼いで来なければならぬといふことで、だまたま入れて頂いた東京海上でも二十六年仕事をさせて頂いているといふことです。思ったより財団といふものは儲からないものでございまして(会場笑)当たり前ですけれど、儲けちゃいけないんですが、大体二五、六年は赤字が続いております。然るに、是非せひ、友の会といふのをやっておりますので、興味のある方にはこの財団をお支え頂けたら、といふふうに思っております。

とはざりながら、その博物館の展示品の数々を、機会ある毎に「贖戻」と、昨年「大徳川展」といふ展覧会を上野の東京国立博物館でやりました。家内はこの財団の学芸部長をしておりまして、かつ学芸員でもあります。彼女も慶應幼稚舎から学ばせて頂いて、あちらは慶應経済を卒業致しました。家内と私は見合いで結婚しておりまして、何でこんな身の上をするかでしょう(会場笑) あちらは会津の家でございまして、人が轍ついているときに、何であんたは大政奉還したんだといふ怒られておりまして(会場笑) あんたの所は三十五万石だし私のところは五十万石もつて言われていっつも頭が上がらない(会場笑) 非常に辛い思いを致している日々でございましてが、結婚早々彼女は私がやつております展覧会にたいがチチをつけてまして、こんなつまらない展覧会、誰か観に来ると言っただすね、夫婦喧嘩の種でございまして。で、そこまで言っただつたら自分で資格を取ってやればいじやないかといふ話をしましたところ、じゃあ判つたと言っただつて慶應大学へもつ一偏入り直しまして、勉強して学芸員の資格を取り、今となつては私以上に私の家のことをよく知つて、仕事をして貰っております。

そんな身内話をしたところではせんないので、例えば、論語と私なんてテーマでしつかりお話を出来れば素晴らしいんですけども、私にそつといふ才能は全くございまして、「論語ね、子曰く」でそこまで言えるんですけども、その先が全然言えなくて、ああそつえば、と久し振りに声に出して語らせて頂いて、やつぱり心に響くものがありますね。そつ感じだ次第でございまして。

三 水戸家、そして徳川家について

私は水戸徳川家の十五代目です。將軍家、尾張、紀伊、水戸、この水戸が私ども水戸徳川家のメインです。昭武が十一代目の当主です。私までの間に十二、十三、十四代目と間に入っている訳です。

私を端的に系図上で申し上げますと、十五代將軍・慶喜さんの曾孫です。なんでそんなのかといふことを説明しなければいけませんか、いわゆる女系図ですと、大政奉還を果たされた後に、慶喜さんは肩の荷を下ろされて乍作りになつて、二十人以上のお子さんをお作りになりました。その十一番目の娘を私の祖父の所に嫁がせました。

然るに、慶喜さんの娘が私の婆さんといふことになりまして、婆さんの親父でありますから曾孫さんだといふことに相成る訳です。その慶喜さんの親父といふのが、水戸家九代目の慶喜さんです。私は慶喜さんの玄孫の子で慶喜さんの曾孫です、といふのが、一番分かりやすいかと思ひ

四 徳川家康と徳川家のルーツ

歴史上、徳川の名前が出てくるのは天文二年（一五四三年）に家康公が松平弘忠の嫡男として生まれた時です。これが徳川家の始まりと言われています。「家康公のルーツ」といのは十代前まで遡れる」と言われておりまして、「三河の國の豪農の家にお坊さんが流れて参りました。この人が、その豪農の家の興さんを運送つて豪農の家を乗っ取つた格好になりました。その方が母を亡くしたのが松平親氏といふ家でございませう。お坊さんだつたのに家を乗っ取つて、名を名乗つて隠俗してしまつた。この方が家康の十代前だそつです。そのもつ丁前は源氏に繋がるといふ系図になっていますが、これは、系図に明らかに書き足した跡がありまして、これは嘘だなといふのが判る訳です。一応は松平親氏公から動定して十代目か家康公といふことになっています。その家康公は、お生まれの後は今川家の人質になつて、その人質中に元服をされます。それから姉川、それから三方ヶ原、長徳、小牧、長久手といふた戦いを経て、天正一八年に北条氏を倒して江戸に入るわけです。慶長三年に秀吉公がくとなると、その秀吉公の子供である秀頼公を大阪城に置いて、五太老といふ形で天下擁りの道を歩み始めるといふことになるわけです。ご存知一六〇〇年、関ヶ原の戦いで勝利し、慶長八年には征夷大將軍となつて江戸幕府を作つて天下人になりました。家康公が言つたいろいろなることを側用人たちが書き留めてある書類、書物があります。

す。その一節には、家康公は天下は、天下の人々の天下であつて、我一人の天下に非ず」といふことを仰つたそつです。

これは家康公の考え方を表した言葉だといふので、お聞きになつた方々も多いかと思いますが、家康公の考え方といふのはどちらかといふと、専制君主になるよりはむしろ共存共栄型といふんでしょつが、どちらかといふと放任主義、自由主義といふた考え方が強い人物であつたといふふうに私どもは聞いています。このいふお話をする時に私どもは聞いてます」と申し上げますが、これは非常に便利な言葉でありまして、「教科書ではそんなことないよ」と言われることもありますが、いやいや私どもはその聞いておられますといふこと、何となく説得力があるんです。本当かといふといふのはよく判りませんが、私また父なり祖父なりからその聞いていたのは事実ですので、家伝としてそれを言わせて頂いていふといふことです。

ただ、家康公はずい嘘を言つているんです。器物といふものは、どれほどの名器であつてもいざといふ時には役に立たないと。室中の宝といふのは入だ。このいふ風にも家康公は仰つておられます。で、器物といふものはどれほどの名器でもいざといふ時には役に立たなかも知れないけれども、器物大好きであります。

家康公は大阪城を焼き落とした後に、「絶対にこの焼け跡にこのいふ品物がある筈だから探せ」と御家来衆二人に命じております。この御家来衆といふのは親子ですが、何を探させたかといふと、茶入れです。「新田」といふ茶入れを探せと。これは信長も茶言も持つた茶入れ、いわゆる

天下人が持った茶入れだ。それが無いと俺の天下は危ない。どつどもそれを探せと言つて、三月月がかりで焼け跡から探し出させました。

その焼け跡から割れた新田を探し出し、燻で接いで家康に献上したその御家菜親子二人は、千五百石を載いだといつてです。金に糸目をつけないといつのはずいとは、と今でこそ我々は思つていますが、室の中の室は人だと仰る割にはそつじつとをなすつておいででした。

それから、「すべて國家の長となるものは慈悲を基とし、人民の憂いを救つべし」と仰つておられます。今の政治家の方々に是非ともお伝え頂きたい言葉であります。

また、「農民は國の宝なり」といつづつにも仰つておられて、いたずらに輕侮、しご使つちやいかんぞ。農民の苦しみは「一粒百行だ、要するに二つが米粒を作る態に百回耕すんだ。春夏秋冬の苦労をして人々を養つて、要するに國民がみんな食つる米を作つてくれて、國民を養つてくれるのが農民であり、農民こそが一番の勤王者なんだと仰つておられます。

そして最後に「なりませぬ、武士たるものは道、義、それから儉約。この三つを行いを守りなさい。まず道に疎くははいかん。次に、道に忠してはいかぬ、文藝の素養がなくては何の役にも立たぬ。また、儉約をしないと我が身を保ちがたい、といつづつに仰つておられます。このあたりは、家康公の國つくりと言いますが、天下を統一された後の、例えは關ヶ原で敗れた側を処遇するに当つても、その考え方が反映されているとも思います。外様の扱いを言わ、濃すといつより大きな右衛門を引えて還さける、といつづつな國の配置の仕方と言いますが、非常に家

家康公は、外に報いるに恩を以つてせよ」と仰つておられるんです。古米、炊飯といつのがあつたわけですが、外に温情で接しようといつのは、なかなか大変なことになると思つておられます。こつた考え方はお國の配置換えであるとか、それから作られた江戸幕府の組織に活かされています。二百年の平和國家の礎になつたんだらうと思つておられるんです。少なくとも三百年間、たゞ戦争がないといつた國家といつたのは近世論で、そつじつ意味でもつと日本人はそのことに自信を持つべきで、このころ江戸時代を見直せといつて話が其処此処で聞かれるようになってきました。もつじつこの意味としては、先進七ヶ國の中で、最後の最後までゼロエミッションの國家であつたといつのが我が國です。環境負荷ゼロ、であります。これは何故ならば、石油といつものをまったく使つていないわけですね。石油をなくせば、あるいは今の世の中から石油を消すと、殆どそのまま江戸時代と一緒です。違つとすれば原子力くらいでしょうが。水力は水車が使われております。灯りといえは菘種とか、胡麻とか、それから鱒の油ですが、こつじつたものでも照明はあつたんです。それから、「エコタコクミッション」といつづつミッションがあります。これはエコタコ自動車さんがお金を注ぎ込んで、東京国立科学博物館が収蔵しているコトクミッションですが、弓矢を引く人形があります。小さな人形が弓を引つて、弓矢先は蓄えて、引いて飛ばすんですね。太

ことになります。日本人は何を考えたかについて、農民と大家さんが契約をしまして、農民がその大家さんの家に溜まった肥を買って帰るんですね。肥料として買います。大体二十人の農屋で、年間一両から二両の間くらい。農民はお金を払っているんです。よく、「小判なんて買たことない」と時代劇で言っていますが、農民は一両二両を肥料代で払えるくらい、お金を持つていきました。肥を買って担いで帰るわけですが、その時に土水と空かけるとなるは、その肥を乗せた船を走らせたいかん。これは水遣用の川ですから、馬車や、駄馬や、いろいろな道具を使っているわけですが、ですから隅田川まで持って行って、隅田川を上がって行って、それを畑で有機肥料として使って、作物をつつて江戸の街に卸す。いろいろな形で循環をしていただろうです。ですから、そういう意味では農民はお金持ちでした。

さて、家康ですが、征夷大將軍になられて、たった三年で辞めてしまいます。お辞めになったのは皆さんもご存知の通り、すぐに息子である二代の秀忠公に座を譲りたいと、こう考えたわけです。これは戦国の世でありまして、他國を攻めて滅ぼして、そこのお城なり家来なり、領地なりを子に与えるという形で、略奪して相続をし、子供を養っていくという形で勢力を広げていっていただけですが、家康公はどちらかというと平和主義的な考え方をなされるので、何をしたらいいかと、自分の財産を相続させたいと考えられたわけですが、ですから將軍職をどうと辞して、一代目に譲るといってころで、世襲といつ考え方を世の中に定着させようといつことをお考えになつたといつことですが、そういう形で、初代から二代目へ、將軍の職を継がれるものになります。

鞍にホコと当る、からくり人形です。据に十キ口以上の力が掛かるものな設計なんだそうです。ばすといつ技術で作られた人形。ぜひ、国立科学博物館でご覧になって下さい。日本の技術力について、その時代からもう本道にすごいなと感心させられるものです。そういった技術に裏付けられて、日本といつ國はつい最近までやってきたわけで、石油がなくなると最後の最後までやれた、珍しい国でした。薪にして木、木、ですから、当然CO2を吸って、それを燃やせばCO2は出ます。が次の木を育てればCO2はフラスコでまた戻ってくるわけですね。

着ている木の毛布です。畑から採れるわけですが、綿であつても麻であつても、全部畑とかお蚕さんから採れるわけですが、ですからそういう意味では、本道はほんとに、環境負荷なしに、畑がみんな暮らして、しかも問題になつていない食料自給率もつたてくれもありません。みんなそれで平和に暮らしてました、といつのが日本の江戸時代です。

よくあの、「お茶は水飲み百姓で、お前の先祖にいじめられたんだ」と仰つて（会場笑）名刺交換される方がいらつしやるんですけど、江戸時代は少なくとおそつて農民は存在しません。あまり大きな声では言えないんですけども、駄説にお話しますと、江戸の街つてもおすくせい、れいな街だったんです。パリはすごく水溜りな街で、よく雨が流れたらって言うんです。江戸の街はものすごく清潔な街で、道にゴミ一つ落ちてないし、校舎においもしないで、昔は水道がありませんから、全部、肥溜めに溜めてあるわけですが、その肥についていっつのはいっつれ捨てる

す。そして天下泰平の世の中というのが、徐々にはありますけれども形作られていったんそこなと思いません。

六 家康から秀忠、そして御三家へ

慶長一〇年、一六〇五年には家康公の子供であります秀忠公が上洛をして征夷大將軍になり、世襲化が完成します。家康公は「隱居」されてから大御所になるわけですが、大御所政治といわれたい家康公に支えられておりました秀忠公も元和二年、一六一六年に家康公が亡くなります。それから先は独り立ちをすることになります。大体が臍抜けてしまつた、一人頑張ることになって、皇子が独立心を燃やすかのどちらかですが、秀忠公は、將軍になるまでは戦場に遅刻して来た、結構いい加減な皇子だったらしいんですが、一代將軍として独り立ちします。そして、譜代大名の改易だとか配量だとか、それから老中制度を作つたのも、この秀忠公です。要は、父である家康公が残した幕府の体制を更に強固なものにしていったといつて、その秀忠公の兄弟、末の兄弟三人が、いわゆる御三家、尾張と紀州(紀伊)、水戸家になります。家康公の九番目の皇子、これが尾張の義直公、それから紀州家の頼宣公、そして水戸家の頼房公です。これが家康公の、ほんとに晩年の子供たちといつことになります。もう、家康公から見たら孫みたいなもので、六歳で水戸家を創設することになります。將軍秀忠公と二十五歳、年の差がある兄弟です。一

六〇九年の四百年後といつのが来年でございまして、水戸徳川家も創立四百周年を間まなく迎えるところですよ。

ところで「尾張、紀州、水戸」と申します。なぜ「尾張、紀州、常陸」ではないのかといつたのはおいでしてしまつたか。別に当てませんけど(空塚笑) 目を背けなくてくださいな。

家康公がある日、自分の部屋にこの三人の兄弟を呼び寄せます。孫みだいなまんでから猫可憐がりしており、「お前等、俺が死んだら何が欲しい」と訊いたら、「これは記録にあります。こいつ私のような言葉遣いをしたかどつかは別ですが、その間きました。そのしだとして、九番目の子供である義直公は、きれいなお道具が欲しい」と言つたそつです。家康公は自分の個人的な財産を持ってもらえます。キッシュコでいって、一十八徳田のキッシュコを持っていました。でも一國の王様、まあ王様といつのは天皇ですが、天下統一をされた方にしてはそんなに多くないかなといつ感じですね。一十八徳のキッシュコを持って、それ以外にその相当の財産をお持ちだったので、そのつかそつかで、じゃあおれが死んだらお前にやると仰つた。それから十番目、頼宣公は何と仰つたかといつて、広い領地が欲しいです」と仰つたそつです。おれ、つかそつかで、じゃあ死んだらどつかの圓やるわ、とこつ仰つた。さて、我等が頼房公の番になりまして、何と仰つたかと申しますと、「天下が欲しい」とこつ言つたそつです。さすがに親父であります家康公は腰を抜かしたもつてして、「こいつは危ないぞ。おともと血の氣が多い、悪するに親父のこつことなど全然聞かんと。で、あねに広い領地を与えて準備なんか

名家があるわけで、その大家にも先駆けというのがいて、お互いにその紋をすれ違ひでまに見るわけですね。で、自分よりも目上が来たなら「これがすれ違ひつじじになる」と自分の殿様を籠から出して頭を下げさせなきやいけなわけです。そして何を考えるかという、紋帳をばはつと繰って「ん、これはやばい。この社長よりも向うの方が格上だ」と思つたらその先駆けを追いかけて行って、名乗ります。「こちらは何々藩の、何の誰々と申す。こちらは何々藩ではなにか？」といつわけです。「如何にも」といつ話になると談話が始まります。何を相談するかという、おぼつちつとておぼは行列がおその宿に入る。このままのペースで来ると、じじの宿で絶対に鉢合わせするから、手前で右に曲がるんで、あんたちよつとだけ行列の速度を落してくれなにかつていづちつな話を、そいで綿密にします。で、お互いが行列に戻つて、片方はペースを上げ、片方はペースを落とす。お互いが、ある宿場の中の裏道と表とで、すれ違ひがちゃんと出来るように。じじつ画策をして、通り過ぎたと言われています。

將軍も世襲になりましたので、九、十、十一男も財産を頂いて、それで家の体裁を整えていくことになりました。その二十八徳田のボクサウエスネーから聞いただけで、尾張は四十徳くらゐ貰つたんですかね。紀州も四十徳くらゐ貰いました。水戸が二十五徳だつたですかね、今のキヤウシヨに直すと、だいたいそのくらい頂きました。残りは將軍が、一代將軍の秀忠公が御取りになるわけです。よく徳川家の埋蔵金なんて言つておられますけれど(会場笑)、多分出て来ないと思います。何故ならみんな遣つちやいました(会場笑)。申し訳ありません。

で、水戸の初代の頼房公といつのはとにかく豪放磊落でありまして、幕府が止めても江戸城の御懸で泳いだり、もつ色々やらかしてあります。光圀さんもまだ、もの變い暴れん坊でして、江戸の町へ遊びに行くわけです。光圀さんの袴といつのが博物館に何十着と残っていますが、一着はビュウ色の金襴きんろうの袴です。とても私が着たらチンドン屋にしか見えない(会場笑)といつような袴ですけれども、そんなものを着て、刃を差して肩で風を切って江戸で遊んでいるわけです。ある日、町相撲に自分も出ると言つて、家臣が止めても聞かなくて、お相撲さんとお相撲をとり、負けたら罰金、勝ったら賞金みたいな形で町相撲はやるわけですが、あまりに負け続けたら、面白くなくなつたんで最後は刃を抜いて斬り付けらやつたりしたといつ、暴れん坊だつたよつです。

さて、江戸時代、御三家といつのは「家」といづつ字を当てて表示します。よく、水戸藩とか尾張藩って言いますね。この藩といつ言葉は、江戸時代には存在しない言葉なんです。これは明治の政府が廃藩置県をする時に何と書いつかいと言つて、藩といづつ字を当てたんです。それ以来、こちら側から過去を眺める時は水戸藩とか会津藩とか尾張藩とか言つてますけれども、実際に江戸時代には藩といつ言葉はあまり使つていない。「常陸国水戸徳川家の侍」といづつ言ひ方をすると、水戸藩士、といづつ言ひ方になつていづつ言ひ方です。

そこ考えて頂くと、家といつのは領地を持つて初めて「家」でございまして、八代の吉宗公とか九代將軍の所から割れました。一橋・田安・清水といづつ三家、これは、領士を持つていない

んです。領地を持つていないので御三卿と言われているんです。御三家、御三卿の「卿」といのはそういう意味です。地位は有っても領地が無い。これが御三卿の意味、逆に言えば領地が無いければ「家」とは言えないといつておつたそうです。

七 水戸家の始まり

家康公の遺孀分けを「千鶴田以上頂いて、水戸家といつのは一六〇九年から形を徐々に築していきます。その初代の頼房公の子供が、「存知知の水戸藩門」光園公です。光園公は、寛永五年、一六二八年に頼房公の三男坊として生まれ、したかつて家康公の孫に当たるわけですが、一六二六年に家康公は亡くなっていきますので、十一年の差で家康公には会ったことがない。光園公のこの名前が、家督を継ぐに当たって時の將軍のところに許可を頂くために掛謁に行くわけです。その時にOKであれば將軍が自分で名前を授けて下さる。これが光園さんの場合は家光公の時代に家督を継ぎましたので、家光公に掛謁をし、光園と名乗れど、いづ言われるわけです。それで、有り難く頂戴しますといつことになるわけです。

さて、光園公には一人の兄貴がいました。真ん中の兄貴といつのは幼くして亡くなってしまつた。一番上の兄貴は、まだ將軍・秀忠公に男の子、世継ぎが生まれていない時に出来てしまつた子供なものですから、親父であります頼房公が、大儀、天下が欲しいなんて戯けたことを言つた人で、それだけでなくも幕府から睨まれていきますので、後継ぎを早目に作つて世継ぎ争いをやるん

だといつ話になってしまつと大事になるわけで、まだ序列からして忠徳越だといつと、「水にしろ」と言われるわけです。しかし家臣によつて京都のお寺へ入れられます。密かに育てられるわけであります。そのことを後で光園公から聞いたのが三代將軍家光公で、家光公が大層感激され、「これは可哀相だぞ。

通例、御三家の分家といつのは五万石程度を頂戴するんですが、十五万石を頂いて、高松平十五万石の初代に立てられます。それが松平頼重公といつ御んです。

光園公といつのは兄貴である頼重公を差し置いて水戸家の二代を継ぐこととなります。そのついで、自分の心に非常な「フッシャー」を感じますし、それに心の葛藤があつて、それで歌舞伎者とされる、所謂不良になつてしまつたわけです。ところが庄内三年、一六四五年に十八歳で突然更正します。その更正のきっかけになつたのが司馬遷の『史記』の「但東(列)伝」といつ歴史書です。以来、儒教・儒学に傾倒されます。家康公は晩年、「書を誦むこと己を廢く」といふこと言つておりますが、そのとおりになつたわけでは、加えてその、但東伝のもつた紀伝体の歴史書は我が國になつたといつて明暦三年、一六五七年、光園公三十歳の時から、『大日本史』の編纂が始まつたわけでは、過去を明らかにするだけでなく國の歴史を作る、綴るといふことになるわけで、それはやはり國の本来の姿を明らかにし、その發達の跡を見極め、かつ將來の有り様といつて、國はどつちの方向に進むべきかといつともな理想を抱けるものだと考へるわけです。加えて、歴史といつのは

人が織り成すものですから、その都度都度の人物について字んだが、その人物の批評をして、読み手は読み手で自分の在り方といいますが、それを正すという効果があるわけです。それが語の有名な一節、彰住考来しよつおつこつらいです。過ぎたるを明らかにして来たたるを考え、といつものです。

その『大日本史』の編纂所を彰考館と名づけ、光園さんは編纂をスタートします。館名を彰住考来といつ言葉から取つたといつことです。

皇統に貫かれた我が国の歴史といつものを、すつと過去へ向かつて紐解いていくわけです。そのついでで光園さんの始めた編纂事業が、幕末にはバリエールになり、「水戸学」といつものを生み出すこととなります。そして更に光園さん自身も、その後の水戸家の歴代の当主たるに向け、何と言つたかといつ、「我が君主が天子なり、いま宗室は將軍家なり」。この言ひました。要するに我々の親分は、いま現在は將軍家だけれども、我々は天皇に仕えているんだ、そこを絶対に忘れるなといつ教えを残した、といつことでして、今も私どもにはそれが伝わって来ているといつことです。

八 水戸光園が遺したもの

光園さんは一七〇年に上つた所です。西山荘といつ所です。その後

『大日本史』の編纂事業は水戸家の歴代の当主に受け継がれます。『大日本史』は結局二百五十年かかって、明治二九年に完成します。幕末を越えてしましますので、そこから先は徳川家のボクスターキーで編纂を続けて、三九七巻、それに目録を付けて四〇二巻が出来上がって、明治天皇に献上するといつ事に相成るわけです。

「梅里先生碑」といつのがあります。常州、これゾウシクマといつと上州と一緒になつちやうどツネシクマといつてすけれど、先生は水戸の産なりと。「其の但は疾が、其の仲は疾す」。これは、兄貴が病気でどこか療養に行つた、と光園さんは留めてるんですね。実際に京都のお寺に匿だ、で、「其の仲は疾す」、仲といつのは「審目の兄貴で、これは死にまじだ、夭折したといつことです。「先生、夙夜膝下に陪して戦戦兢兢たり」といつのは、兄貴が生きてゐるのに、自分がその跡取といつことで指名を受けていて、非常に落ち着かないといつことを言つています。

この梅里先生の碑といつのは、光園さんが藩主を引退した時に自分の衣冠冢を埋め、「まづ自分は政治には参加しませんよ」といつことを言つて、自分が生きてゐる間に作つた藩主、「水戸家当主としての自分」を葬つたお墓であります。そのお墓には「梅里先生の墓」といふことが彫つてあるんです。その墓石の裏側にある碑の文章がこれです。この中に論語の教えがたくさん出てゐると思ひます。いま私がお話ししたちつなことが、この中に凝縮をされてゐるといふことで

この慶喜公のお母さんは有栖川宮から興入れをした方で、齊昭さんの正室です。大河ドラマ「篤姫」の江守徹さんがやった齊昭公の奥さんです。この方が有栖川宮から来たお姫様です。その間に生まれた子ですから、実は将軍として、皇室の血が入った将軍というのは慶喜さんが初めてのことになります。ですから、皇室に政権を戻すことについて、自分の血の中に皇室が半分は入っているし、母親についてきた宮中の女性たちから皇室の話が聞かされて育ってきたわけですから、そういう意味でもあまり抵抗がないわけです。で、光圀さんがお始めになつた大

九 徳川慶喜と大政奉還

さて、その齊昭さんのお子さん、やっとな私の曾爺さんと同じくまで来ましたが、齊昭さんの七孫目の男の子というのが徳川慶喜さんです。松平昭致あきむね公と名乗っております。跡取り以外はみな松平と当時は名乗っております。松平昭致さんになつて、一橋家へ養子に出るようになります。そして、一橋家から十四代将軍が長州征伐にお出になつた時に急死をなされたので、あ、誰もこの幕末の動乱期に将軍なんてやりたかあないと言つんで、尾張も紀州も適当な子がいらつたらなかつたといつこともあり、一橋の当主でいた慶喜さんに白羽の矢が立ち、十五代将軍となるわけです。その時点で初めて本当は「けいき公」、慶喜公といふ名前を戴くことになり

差し掛かっている。その齊昭さんは一八四〇年を過ぎるから水戸に藩校をつくります。これが水戸の弘道館です。でも、そこで勉強ばかりしてははいかんぞ、己にも一弛一張ありと言いますが、いっつも張り詰めていると弓はずれゆがんでしまふ。そして、じつとじつと老にはつとも役に立たなくなると、だから弓というのは弦を外して休めなきゃいかん、まあいっついで。馬も、ずっと走らせておくと死んでしまふ。やっぱり走つたり歩かせたり、休ませたりといっつう必要だ。これが人間にも当てはまるでしょ。弘道館でお勉強をしたら疲れるよね、野良仕事をしたらくだびれるよね、そしたら僊樂園へ来て皆で休みなさい。といっついで、この藩校弘道館と僊樂園をセットでオープンさせたといっつ殿さんです。その齊昭公の考えが、『弘道館記』であるとか、『僊樂園記』に書いてあります。この僊樂園といふ名前は、まさに齊昭さんかお付けになつた名前です。

そこから百年後に私の曾爺さんの親父、女系図でいへば曾爺さんの親父、爺さんの爺さんの親父であり、齊昭公が生まれます。一七〇〇年に光圀公が亡くなって、ちよつと二世紀経つたところで齊昭さんが出て来る、といっついで。この方はご存知のとおり、激動の時期に生まれて来た。アメリカの首都がワシントンになつたのは一八〇〇年ですよ。外国船がちょろちょろ日本本の方に来て、アメリカとかロシアとか通商をしようといつのに、鎖国ニッポンの権化であり、幕府側はそれによつと区別し続ける。いっつう状況の中で、やあどつするといつ時期に

日本史の事業とともに、家康公なり光圀公なり、歴代の殿さん方の考え方がすべて、藩校弘道館でのスバルタ教育で慶喜さんに叩き込まれましたので、先に光圀公が仰った「君主は天子だ」という言葉と自分の血と、それから当時の情勢、例えば英仏の代理戦争、まさに日本が苦難を割って英仏の代理で戦争を始めたら今の日本はどつなつたか、という所に來るわけです。もしや、英國領とフランス領に割れたかも知れません。そこなつた時には神様仏様でなくアームズだつたかも知れません。そんなこともあつて慶喜二年、一八六六年の二月に將軍に任命され、翌年、慶喜三年の一月には大政奉還が行なわれます。だつた十ヶ月の間で、二百六十年にわたる江戸時代に幕を引いて、新しい時代の幕を開けたといつことです。

慶喜さんはずっと將軍時代を大阪・京都で過しましたので、江戸城には居ないんです。それから天璋院さんが江戸城で一人、頑張つておられた。この天璋院さんがどうなつた理由といつのが、島津から来たお姫様でありながら、私は徳川の人間だから島津家からの施しは受けなれど、それが美談となつて残っているわけですし、それで大河ドラマ化されたといつことです。後日、孫達か本人に聞いた話として私どもも伯父から聞かされました。でも、「何で大政奉還したのか？」と孫どもに慶喜公が聞かれたらいいんです。そこしまつたら少し黙考して、「あの時はああするしかあつたんだ。誰がやつたつてあんなつたんだ」と孫達に仰つたさつです。十人位の孫がそれを聞いておりますので、聞き間違いはないだらうと思つています。貝、權そつにも聞かえますし、もつ世の中の情勢を見たらさつするしかないよ。そこしないよ、

日本といつ國体を維持できない、といつよつたことを感じ取つておられたのかも知れません。今となつては御本人に直接聞くわけにも参りませんので分かりませんが、私どもとしては、とにかく世界に冠たる無血の大革命を成し遂げられたのは、ごちの祖先だと、これが身肉の鼻眉目ですけども、そんな思つております。

十 最後に、名前に託した思つ

慶喜さんが大政奉還後にたくさん作つた子供の一人が、先ほど申し上げました私の婆さんで、彼女が産んだ水戸徳川家の孫、慶喜さんから見れば外孫になりますが、絶対に俺が名前を付けるといつて聞かなかつたんださつです。私の爺さんもついに根負けして、慶喜さんから頂いた名前が園宮でした。これが私の父親です。慶喜公の大政奉還に到るまでの波乱の人生を支えた、光圀公以来の教え、教えの源が光圀さんといつわけですが、その光圀さんの園の字、そして、それを自分に教えてくれた親父であります齋昭さん齊の字。この二文字を採つて園齊と名付けたと言われております。故事來歴は別にしまして、親父は、非常に重たい名前を嫌だ、と申しておりました。私の名前が、自分で名前を付けられて、一權家に出た自分の血をお里で、ある水戸家に戻した格好になります。そこついで、慶喜公の幕末が本当に終わつたんださつなあと、身肉としては考えているところさつです。

536
時間が流れて百年、二百年経っても、続いて来た血の流れや先祖、子孫に対する思いは変わらないことを改めて感じていただければ幸いです。(会場担当)

【第五回、平成二〇年一四三回】